



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マルクス・レーニン主義の考古学としてのソヴィエト考古学 : 1920~1930年代の研究動向からの検討
Author(s)	鈴木, 建治; Suzuki, Kenji
Citation	北方人文研究, 3, 29-44
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/42937">https://hdl.handle.net/2115/42937</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	JCNH3_003.pdf



# マルクス・レーニン主義の考古学としての ソヴィエト考古学

— 1920～1930年代の研究動向からの検討 —

鈴木 建 治

北海道大学大学院文学研究科 歴史地域文化学専攻 博士後期課程

## 1. はじめに

1917年の十月革命から1991年の崩壊まで続いた世界初の社会主義国で行われていたソヴィエト考古学<sup>1)</sup>は、2つの側面をもつ。ひとつは地域文化史研究であり、もうひとつは人類社会史研究である。

民族集団の歴史の変遷を念頭に置いた地域文化史研究は、1920年代後半から1930年代前半に起こった「地域・郷土史研究の弾圧」や「研究の中央集権化」が終わりに向かい、また研究方針の転換も相俟ったことにより、第二次世界大戦後の1940年代から1950年代に掛けて活発化していった。地域文化史研究は、現在に至るまでにその理論・概念や方法論は様変わりしているが、基本的には今のロシア考古学においても中心的な研究であることは間違いない(Васильев 2004)。また、この研究の系譜は、革命以前の近代国家の形成過程に伴い、「ナロード(Народ：国家に準ずる組織を持てる民族)の考古学」と「ナーツィア(Нация：国民)の考古学」としての「スラヴ・ロシア民族の考古学」を実践した帝政ロシア時代の研究者たちによって、革命後のソヴィエト考古学へ継承されていったことが指摘されている(加藤 2009：129-132)。一方、社会形態や社会制度といった社会構造と生産技術といった経済構造による発展段階論的史観を復元する人類社会史研究は、マルクス・レーニン主義による歴史観を色濃く反映したものであり、1920年代後半から1930年代前半に「物質文化史」研究として顕在化した。この時期の「物質文化史」研究は、遺跡・遺物分析を重視する考古学を否定するという激しい一面も持っていたが、1930年代後半からは、遺跡の発掘調査や遺物分析を基礎として語られるようになった。だが、1950年代以降、ソヴィエト考古学において地域文化史研究が大勢を占め、この研究の志向性は次第に薄れてしまう。

地域文化史研究や人類社会史研究に代表されるソヴィエト考古学における最も重要な点は、国家的テーゼであるマルクス・レーニン主義を教義とした歴史観が時期にも左右されるが多かれ少なかれ、ソ連邦の崩壊までその根底に存在し続けていたことにあると考えられる。「考古学という学問領域」と「国家や党のイデオロギー」とが強く関連していたソヴィエト考古学の研究史を検証することは、考古学という先史を対象とする学問が国家権力に迎合する危うさについて認識することにも繋がると考えられよう。

以上、このような視点から、マルクス・レーニン主義をめぐるソヴィエト考古学<sup>2)</sup>の中での変動が一番顕著であった時期を20世紀前半と考え、1) 革命後から1928年まで：革命前の考古学的方法論

の継続、2) 1929-1933年：遺跡・遺物分析を否定・排除した考古学の「社会学化」としての「物質文化史」研究の躍進、3) 1934年以降：遺跡・遺物分析に立脚した客観的な歴史認識による考古学の成立というように3つの時期に大きく区分し、マルクス・レーニン主義に基づいた考古学としてのソヴィエト考古学がどのように変遷してきたのかを検討する。

なお、本稿は、近年出版されたサンクト・ペテルブルグのS. A. ワシリエフ (С. А. Васильев) による旧石器研究を中心とした研究史 (Васильев 2008) と、モスクワのA. A. フォルモゾフ (А. А. Формозов) による全体主義体制に関連したロシア考古学の研究史 (Формозов 2006) を主に参考として整理したものである。

## 2. 1928年代以前の研究動向

1920年代は、レーニンの死後の党体制における権力争いが展開された時期であった。スターリンは、まずは党の民主化を試みたトロツキー、次に「ネップ (新経済政策)」をめぐるジノヴィエフやカーメネフ、そして穀物の調達難に端を発した非常措置をめぐるブハーリンやルイセンコと権力闘争を繰り返し勝利していった。この権力闘争の勝利により、スターリンの独裁体制は次第に確固たるものへと変わっていった。

### (1) 古民族学的研究と文化型式学的研究

1920年代のソヴィエト考古学を取り巻く状況をみると、基本的にロシア革命以前から続く方法論を継承する研究が営まれ、学問領域における「ポリシェヴィキ化」はそれほど強くなかった。またそれは、考古学の世界的潮流から大きく外れる研究でもなかった。この時期の研究方法は、古民族学的研究<sup>3)</sup>と文化型式学的研究に代表される。

1920年代を席卷していた理論的方向性は、帝政ロシア時代の研究者であるD. H. アヌーチン (Д. Н. Анучин) やF. K. ヴォルコフ (Ф. К. Волков) によって研究されてきた古民族学的研究であった。B. S. ジューコフ (Б. С. Жуков) によれば、古民族学とは、古代の諸人間集団の社会制度、技術、経済・生業、生活様式や行動を研究する科学である (Жуков 1930)。古民族学の視点に立てば文化交替は、周辺環境の諸条件と関連性が低い進化論的解釈により論じられることになる。ここに見られる考古学における自然科学と人文科学の融合は、1920年代の古民族学的研究の特徴と言える。また、この学派の系譜をひくG. A. ボンチ-オスモロフスキー (Г. А. Бонч-Осмоловский) やP. P. エフィメンコ (П. П. Ефименко) は、周辺環境の諸条件も考慮した生態学的見解を旧石器研究へ導入する研究を実施している。特に、ボンチ-オスモロフスキーは、人間社会の形成過程における転換点を捉えながら、人間社会と周辺環境との関連性を具体的に考えていた (Бонч-Осмоловский 1932)。このような生態学的見解は、進化論を前提する古民族学的研究の派生として行われている。

古民族学的な研究方法と共に、「型式」と「文化」に対する正確な分類法の確立へ向けた試みが着手された。文化型式学的研究である。この手法の代表的な事例は、V. A. ゴロツォフ (В. А. Городцов) やエフィメンコなどによる地域文化現象を分類する研究や、ボンチ-オスモロフスキーによる進化論的見解を基本にした文化変化の研究などに代表される。後に人類社会史研究の代表的研究者になるエフィメンコは、この時、考古学における「文化」という概念に対し、ある一定地域内における「時代性」と「生活痕跡のコンプレックス」という二重の意味をもつものとして考えていた。エフィメンコは、最終的に「文化」概念に「民族」という意味も付加していった (Ефименко 1923)。

この2つの研究手法を対比するならば、古民族学的研究は通時的方向の変化による編年論的視点を、文化型式学的研究は共時的方向の変化による分布論的視点を得意としたと評価できよう。

## (2) 1920年代のソヴィエト旧石器研究における考古学的方法論の発展

1920年代は、ソヴィエト旧石器研究にとっても大きな転換期でもあった。平面的発掘方法や地域文化論の提唱をはじめとして、石器組成の統計的分類法や石器製作技術の研究方法といった新しい研究方法や概念が生み出された。特に、旧石器時代の住居構造研究は、この時期からソヴィエト旧石器考古学においてははじめられたものである。現在では1920年代の旧石器研究は、研究の大部分が未完成の荒削りなものであったが、その後の学問的成長に大きく寄与する潜在性を秘めた研究段階として、ロシア・ソヴィエト旧石器考古学史において重要な位置を占めていると評価されている(Васильев 2008: 36)。

その中でも、過去の集落復元を目的とした遺跡内空間分析の出現は、それまでの文化の変化を時系列毎に分析する層序学的編年研究に変わり、先史時代の社会形態や社会制度を解明する手法を獲得したことを意味し、ソヴィエト旧石器考古学において特記に値する。

その当時、ロシア平原に位置するコスチョンキ遺跡群を調査していた研究者たちは、旧石器時代の遺跡に人的な構築物が残されていることに気づきはじめていた。

1925年に実施されたコスチョンキ I 遺跡の調査報告でエフィメンコは、炉を伴う「落ち込み(ピット)」を何らかの住居状の構築物と想定した(Ефименко 1926)。そして、1927年に S. N. ザミヤートニン(С. Н. Замятнин)が実施したガガーリノ遺跡の発掘において、遂に旧石器時代の住居構造の発見を迎えた(Замятнин 1929, 1935)。1930年代後半に実施されたコスチョンキ I 遺跡における整備された平面発掘方法の採用を契機として、この旧石器時代の住居構造の調査は、以後、広大なソヴィエト領土内で相次ぐ類似した旧石器時代の住居構造の発見に結実していった。このように1920年代に開始された旧石器時代の住居構造・集落構造研究は、先史時代の社会形態や社会制度の復元に大きな役割を演じる分野となった。

## (3) 1928年代以前の研究動向のまとめ

1920年代のソ連においては、十月革命や市民戦争による激変、スターリン体制に伴った政治テロルやイデオロギー的独裁の確立により、帝政ロシアからの学問的発展が著しく阻害された。また、研究者の非業な死や亡命などにも見舞われた。しかし、それは、後の1930年代と比べるとイデオロギー的弾圧はそれほど強くなく、科学アカデミーの組織は帝政ロシア時代から自身の研究活動を続けることが可能であったといえる(Васильев 2008: 21)。だがその一方で、マルクス・レーニン主義を考古学に持ち込む緩やかな試みが V. K. ニコリスキー(В. К. Никольский)によってはじめられていた。グロツォフの研究ともつながりを持つニコリスキーは、考古学的文化研究と民族学的文化研究を融合した複合的方法論を用いて、考古学の「社会学化」を目指した。この研究は、次の時期に圧倒的な飛躍をみせた「原始社会史」研究を支える方法論的基盤をつくったといえよう(Никольский 1923a, б)。

また、1919年に設立されたペテルグラードのロシア・アカデミー物質文化史研究所(ライムク: РАИМК)が、1926年に国立アカデミー物質文化史研究所(ガイムク: ГАИМК)へと名称が変更された。このガイムクが、次の時期、マルクス・レーニン主義の歴史観を教義とした「物質文化史」研究の理論的牙城となっていった。

### 3. 1929-1934年の研究動向

1928年末から1930年代初めまでの時期は、政治的にも、社会的にもロシア史における大きな転換期であるスターリンの「上からの革命」が実施された。1927年と1928年における冬の穀物の調達難は、農民に対し圧力をかけ非市場的な方法で穀物を供出される非常措置を引き起こし、スターリンによって「ネップ（新経済政策）」からの転回が図られた。つづく1929年、スターリンは、『プラウダ』に寄せた「偉大なる転換の年」という論文の中で、第一次五カ年計画における農業の集団化の強行と重工業化の促進を主張した。この「上からの革命」の中で、第一次五カ年計画と共に重要な位置を占める党体制の体質に関する問題に対して、「文化革命」が断行された。スターリンの「文化革命」の主な目的は、レーニンやトロツキーが重要視した「ブルジョワ」知識人・専門家を弾圧し、「プロレタリア」知識人・専門家を登用することにあった。つまり、それは、「ブルジョワ文化」から「プロレタリア文化」への転換を意味していた。スターリンは、1928年のシャフトウイ事件<sup>4)</sup>を契機に、革命以前に教育や訓練を受けたブルジョワ知識人・専門家の弾圧を行い、伝統の破壊を押し進めた。

勿論、考古学も弾圧の例外ではなく、革命前の教育を受けた考古学者が「ブルジョワ考古学者」として激しく弾圧された。Yu. V. ゴーチエ (Ю. В. Готье)、S. I. ルデンコ (С. И. Руденко)、S. A. テプロウホフ (С. А. Теплоухов)、M. P. グリャズノフ (М. П. Грязнов)、ボンチーオスモロフスキー、A. A. ミーレル (А. А. Миллер) などが逮捕された。また、ジューコフは粛清された。多くの考古学者が研究活動を追われていった。

#### (1) マルの「ヤフェット理論」

ソヴィエト考古学は、1930年代からまったく新しい様相を呈しはじめた。この時期から、ポリシェヴィキによって学問分野のマルクス・レーニン主義化が徹底的に開始された。

基本的な研究方針は、当時、考古学の中心的役割を担っていたレニングラードのガイムクで所長として全権を握っていた、言語学者 N. Y. マル (Н. Я. Марр) の思想である「ヤフェット理論」が考古学を支配した。インド・ヨーロッパ言語学の伝統に対置されるマルのこの理論によれば、言語の歴史的発展とは、多種多様な種族の方言が連続的な混成を経て統一される。言語の変化は民族集団の交替ではなく、普遍的な言語基体が社会変革に起因する交替によって生じる、と考えられた。

マルの理論は、社会科学における公式的見解として採用され、マルクス・レーニン主義的ドグマの代表的な図式とされた。

言語の起源というマルの関心は、当然、旧石器時代まで遡ることとなった。マルは、想像や表象による直接的思考の運動会話の段階は発声言語に先行すると考え、下部旧石器時代との関連性を想定した。そして、上部旧石器時代において、絵文字記述による文字が萌芽すると考えた。

マルは、先史時代における文化コンプレックスによる区分設定を断固として認めなかった。マルの忠実な信奉者の言語学者であり考古学者でもあった I. I. メシャニーノフ (И. И. Мещанинов) は、考古的資料を「遮断された見通しの利かない仕切りによって、エトノス、文化、時代というラベルごとに区切られた箱の中へ押し込まれただけのもの」(Мещанинов 1930: 35) として切り捨てている。マルは、考古学や民族学を極めて批判的に見ていた。それらは、学問の中に独自の領域を築くものでなく、総合的な「物質文化史」にとって未完成な資料を提供するだけのものであると捉えて

いた。マルは、そこに型式学的研究の有害な志向性を感じていた。

1930年代はじめ、考古学における伝統的な研究体制に対し、根本的な分断が開始された。研究中央機関の業務、授業体制、博物館の展示方法などのすべてに対し変更を迫られた。また、1920年代に始まった郷土史研究の組織が解体され、研究機関はすべてレニングラードとモスクワに集められた。ガイムクでは、党機関から思想指導者として派遣されたS. N. ブィコフスキー (С. Н. Быковский) とS. F. キパリーソフ (С. Ф. Кипарисов) が、考古学にマルの理論の導入を積極的に取り組んだ。雑誌において、発掘調査や考古資料の事例研究による論文は姿を消し、その代わりにマルクス、エンゲルス、レーニン、そしてマルの文章を際限なく繰り返し引用した論文によって、その紙面は占められた。

## (2) 「物質文化史」という新しい学問

1930年代前半において、「物質文化史」という新たな学問が現れた。V. I. ラヴドニカス (В. И. Равдоникас) によれば、「物質文化史」とは、社会・経済的發展段階と文化発展との関連性を追及することが可能な、原始から現代までの全時代に及ぶ人類社会史という統一的科学である (Равдоникас 1930)。ブィコフスキーやA. V. アルツィホフスキー (А. В. Арциховский) などといった研究者は、単に「物質文化史」として区切るのではなく、更に議論を拡張して、歴史を語る諸社会科学の総体として考えていた (Быковский 1932, Арциховский и др. 1932)。この「物質文化史」という概念は、宗教や芸術と関係する諸資料も含めつつ、学問領域を極めて拡大して考古学者たちにより論じられていた。もはや、「物質文化史」研究の前では、革命以前から継承・蓄積されてきた考古学的方法論や考古学的用語は否定された。この時期、キパリーソフ、ブィコフスキー、そしてラヴドニカスが、ソヴィエト考古学に対する「新しい方向性」の先導的研究者となった。革命以前の教育を受けた帝政ロシア考古学における弾圧は、ガイムクだけでなく、科学アカデミー、科学研究ロシア協会 (ラニオン：РАНИОН)、ロシア博物館といった研究機関でも強化されていった。

この時期、考古学は歴史科学における補助的な分野でしかなくなってしまい、また社会学とも混合してしまい、独自の学問的領域を失ってしまった。「物質文化史」という新しい学問の課題は、社会形態や社会制度、経済や生業、生活習慣の復元であり、考古学の「社会学化」を志向した学問であった。この方向性は、考古資料をマルクスやエンゲルス、レーニンの理論によって解釈し、先史時代の社会形態や社会制度、生産技術を發展段階史観に沿って研究するものであった。考古学において遺跡や遺物の研究といった従来の個別事例の研究は軽視され、思弁的・理論的側面を強調する研究へと方向転換された。

「物質文化史」研究の中心地であるガイムクでは、原始共同体、古代制、封建制だけでなく、資本主義や社会主義の物質文化をも研究対象に設定した。ガイムクが提示した雑誌の諸規定では、発掘調査や出土遺物についての論文を掲載することができなかった。ガイムクにおいて遺跡・遺物分析を重視する考古学は、廃れた「ブルジョワ学問」あるいは「モノ (遺物) 研究 (вещеведение)」と呼ばれ蔑視・軽視された (Формозов 2006: 57)。

しかし、「物質文化史」研究を志向する研究者のすべてが、考古学的方法論を完全否定していた訳ではないことに注目する必要がある。ラヴドニカスは考古学的方法論の重要性を少なからず認識していた。それに対し、キパリーソフやブィコフスキーらは「物質文化史」研究の方法論や理論の構築にもっぱら従事し、考古学の「社会学化」を徹底した。この時期の考古学的方法論の採用は、各研究者における才量の程度問題に帰するところがあると考えられる。しかし、この「新しい学問」

の研究者たちは、基本的にはマルクス・レーニン主義による発展段階史観を前提としながら、人類社会を思弁的・理論的に理解していた。

### (3) 人類社会の起源論や発展段階論の研究

人類社会の発展史の復元に関する1930年代初めの議論は、発掘調査や遺物研究を軽視した思弁的・理論的な循環論により繰り返行われていた。フォルモゾフによれば、現在モスクワの考古学研究所に保管されている1930年代初めに提出された発掘調査に関する報告は、評価するに値しないものばかりであり、それらのひとつは、氏族制の解体に関する建築構造の遺跡研究についての数ページの記載で構成されたものでしかなかった(Формозов 2006: 58)。

1930年代初めに広まった考古学の「社会学化」としての「物質文化史」研究は、今までの型式学的概念を一切排除・無視し、「トーテミズム社会」、「前氏族社会」、「氏族社会」などといった社会形態や社会制度の諸概念をただ導いただけであった。または、マルクスやエンゲルスのテキストを基礎とし、原始・未開段階の社会構成を軸とし、家族婚姻関係の特徴の解明も実施された。このような考古学的方法を無視し、エンゲルスの見解に則って描かれた家族・親族関係の図式に沿って強引に復元する研究は、「物質文化史」研究の擁護者自身たちによって実施されたが、それは明らかに「不自然さ」を伴うものであった。(Васильев 2008: 38)。

考古学の「社会学化」の象徴的な出来事のひとつとして、1929年のゴロツォフの弟子であるモスクワの若い考古学者集団によるマルクス主義的歴史学会の社会学派部会での強烈的な声明を指摘することができる。彼らは、古民族学的研究をマルクス主義的科学に反する「ブルジョワのまがい物」と批判した。その中の一人であるアルツィホフスキーは、考古学は民族学的資料を援用しなくても独自の社会学的特徴を持っている学問であると主張した(Арциховский 1930)。ここでは、労働用具研究を基本として古代社会の生産力が復元され、住居構造や集落構造の形態、埋葬、交換の特徴に沿って家族婚姻制度が復元された。また、宗教・埋葬儀礼や埋葬品と考えられる証拠に沿ってイデオロギー的上部構造が復元された。これは、遺跡・遺物研究を重視した帝政ロシア考古学を軽視し、社会形態や社会制度、生産技術を発展段階に沿って、ただ当てはめただけの研究であった。

ガイムクの理論家たちによるこの新しい方向性とは、普遍的法則性に立脚した人類社会の発展過程、つまり普遍的な「人類史」を検討することであった。この視点においては、新たな居住者の入植によって文化の様相が変容するという、今まで帝政ロシア考古学で語られてきた集団の移動や移住という概念が拒絶された。たとえ集団の移住が多少なりとも存在したと仮定しても、文化の発展自体は移住によって達成されるのではなく、その地域に次なる発展に必要な文化の原型が既に存在し、それによって内的な文化発展が遂げられると考えられた。そのような主張がなされた背景には、集団の移動・移住論とは人種主義であり、人種主義とはファシズムとであるとえられる当時の社会的状況が存在した(Формозов 2006: 58)。ラヴドニカスも、集団の移動・移住論は帝国主義的思想の塊であると断罪している(Равдоникас 1930: 58)。また、旧石器時代の集団が後退する氷河に続き北への拡散する状況を示した地図を描いたA. Y. ブリュースフ(A. Я. Брюсов)とM. E. フォース(M. E. Фосс)が、直ちにプニコフスキーにより、集団の移動・移住論における人種主義的・ファシズム的思想であると批判され方法論の変更を強要されたのも同様の影響によるものと判断してよからう(Формозов 2006: 59)。

このようなラジカルな手法を提示するガイムクの研究の敵として「生物学的傾向(биологизаторство)」も標的にされた。ここでは、人間の祖先が動物から派生したという考え方が否定され、獣群

と人間集団は異なるという非歴史性・非進化論が採用されている。革命前後、考古学者が実践した考古資料の区分は、分類学や系統分類学の分野における生物学者の試みと共に成長してきた。しかし、ガイムクの理論家たちにとって、それらの研究は有害なものでしかなかった。ラヴドニカスは、古生態学に依拠するジューコフの研究に対して帝国主義に寄与しているものと非難を加えている(Равдоникас 1930)。また、ボンチ-オスモロフスキーの生態学的傾向も批判の対象となった(Формозов 2006: 60)。

#### (4) 型式学的方法論の否定

O. モンテリウス (O. Montelius) による型式学概念によれば、人間の諸活動は、何らかの法則性に準じており、人間が創造する人工物の型式の変化や発展は、自然環境に支配されている発展的な法則に規定されている(Геницг 1982: 166)。型式学は、人工物へ進化論的法則性を適用したものであり、人間の意思が本能的領域の法則性と関係があるということを前提とする。過去の遺物は、あたかも動物的組織のように発展・進化すると思われた。よって、個々の人工物は一個体であり、型式学的系統性は「属」の発展を表し、そして、「属」へと分岐していく型式学的系統性の集合体は、「属」の上位カテゴリーである「科」を形成していると想定された(Геницг 1982: 166)。

このような型式学的方法論に対し、ガイムクの理論家たちは、人間活動や人間自身、そして社会経済的条件から隔絶された法則性であると考え、遺物に対するフェティシズムであるブルジョワ考古学として断罪した。型式学的方法論は、分析のために初期資料を作り変えられるだけでなく、更に分析自体を記号化したそれ自体意味を持たない形式主義に近づけることによって、方法論自体をも形態学的・型式学的なものへと変化させていくことを強要していると批判した(Геницг 1982: 168-169)。

ラヴドニカスは、型式学的方法論による連続的適応性において、最終的に何が理解できるのかという疑問を提示している(Равдоникас 1930)。ラヴドニカスが考えている社会経済学における物質文化とは、諸社会形態による完全なる断絶(発展段階論的史観に沿った時代区分)の存在により、研究の目的や対象が明瞭に区分されるものである。しかし、型式学的系統性の中で遺物は、ありもしない幻想的な自発性や自主性によって生きていると指摘する。そして、あたかも遺物自体が、独自に発生し、独自に発展しているようであると主張した。それは、閉じた中で生きているフェティシズムによってつくられており、考古学的なフェティシズムは、単に物神崇拜によるブルジョワ的なものに固有な反映に過ぎないと非難した(Равдоникас 1930: 25-27)。

また、Быковскийは、型式学的方法論は遺物や考古資料の単なる外面的研究の手段であるにすぎないということを述べた(Быковский 1931)。この方法論を採用している研究者たちは、研究対象における現象の本質に深く入り込もうとしないと指摘している。型式学的方法論とは、ただ表面をなぞっているだけの研究である。そして、それは、社会主義と敵対関係にある富農(クラーク)やネップマン(ネップ時代の成金)を作り出すことと一致し、また、「モノ(遺物)研究」とは、ブルジョワ的なものへと落ちる社会的恐怖の指標と一致すると主張した(Быковский 1931: 4)。

しかし、先ほども指摘したように、ラヴドニカス自身は、型式学的方法論に対し完全なる否定を表明している訳ではない。ラヴドニカスは、物質文化史において、型式学的方法論とは、技術的な補助的手段として利用できるものとして捉えている(Равдоникас 1930: 62-65)。1920-30年代のソヴィエト考古学の研究史を記したV. F. ゲニーツィグ(V. Ф. Геницг)によれば、ラヴドニカスによるアルツィホフスキーの「ヴァーチチの墳丘墓(クルガン)」への批判は、その方法論自体にて

はなく、具体的な適用・利用方法に向けられているという。ラヴドニカスは、諸型式の組成において型式間の関係性が存在しない中で民族を説明していることが間違いであると考え、それらは時代が異なる型式により設定されたのだと指摘したのであった。遺物の分類作業において、まとまった単位や遺物の集合体を同等に抽出することは難しく、このような条件を満たすものはないと主張した。そして、このような型式学的研究によって、文化の起源や社会歴史学を語ることはできない、と想定した。よって、分類学や型式学自身の作業に効果的なものはなく、有益な結論を導き出すことができないと考えられた (Гениц 1982: 169)<sup>5)</sup>。

1920年代末から1930年代前半の型式学的方法論に対する批判は、考古学的方法論でしかない型式学自体によって文化の「起源」の本質を導くことができないという点に存在する。文化の起源が明瞭でない状態では、「伝播」や「拡散」とは、単なる「繰り返し」に過ぎないのではないかと疑問を投げかけた。そこにあるものは、「人間」不在の自然淘汰による進化論による前提であると指摘してきた。このように帝政ロシア時代の「古民族学的研究」や「文化型式学的研究」は、遺物自身があたかも進化して形態変化を遂げたような見解を擁護する型式学的方法論の性格から非難されたのであった。またこれに加え、イデオロギー的側面からは、物神崇拜による帝国主義的・人種主義的なブルジョワ的方法論として糾弾された。

#### (5) 1929-1934年の研究動向のまとめ

1929-1934年の弾圧期の多く考古学者は、それぞれ自身の意思に沿ってあるいは意思に反して、普遍的な「人類史」の解明を目的とした考古学の「社会学化」としての「物質文化史」を取り入れた。この「新しい考古学による再建を志向する熱心な闘士たち」から酷く苦しめられたゴロツォフは、考古学の「社会学化」をやむなく試みた。ボンチ-オスモロフスキーもまた、1930年代のいくつかの研究の中で、発展段階論を評価した<sup>6)</sup>。長い間、ボンチ-オスモロフスキーや M. Y. ルディンスキー (М. Я. Рудинский) といった1920年代の古民族学を代表する研究者は、自主的な研究を実施できなかった。1930年代終わりになって、やっと、ボンチ-オスモロフスキーは、1928年に印刷準備が終わっていた「クリミヤ地域の旧石器」を出版することが可能となった。(Формозов 2006: 61)。このように1930年代は、考古学者の多くは、自らが思う考古学とは違う議論を強いられ、そして詳細な研究から遠ざけられた。ボンチ-オスモロフスキー、ザミャートニン、A. A. イエーセン (A. A. Иессен) などは、野外調査や遺物整理、そして遺物の分類作業に没頭した。また、ゴロツォフ、D. N. エディーニク (Д. Н. Эдинг)、フォースなどのモスクワの研究者も同様の行動をとった (Формозов 2006: 62)。

#### 4. 1934年以降の研究の研究動向

1929年に起きた資本主義的国家の大恐慌を横目に、おおむね成功した第一次五カ年計画と順調に進んでいる第二次五カ年計画によって、計画経済の優位性を世界に知らしめたスターリンは、1936年末に社会主義の実現・創建を高らかに宣言した。更に1937年の2～3月におこなわれた中央委員会総会において、スターリンは、社会主義を建設した唯一の国であるソ連邦が敵国に囲まれているという考えを強調し、ファシズムに対抗する姿勢を見せた。だがその一方で、1934年、スターリンは大粛清をはじめた。大粛清の契機となったキーロフの暗殺事件により、ジノヴィエフとカーネメフが逮捕され、1936年に処刑された。そして、1938年、ブハーリンやルイセンコらが処刑された。

この大粛清は、党の上層部に留まらず、各分野の知識人にも及んだ。

#### (1) 一国史としてのソ連史とマルクス・レーニン主義による歴史認識の客観性

1934年のソヴィエト共産党中央委員会とソヴィエト人民委員会議による「歴史教科書に関する決議」は、変革のイデオロギーから体制維持のイデオロギーへという転向を引き起こした。それは、これまでのソヴィエト考古学にも大きな変化をもたらした。これにより考古学も含む歴史学は、それまでの普遍的な「人類史」ではなく、個別的・特殊な「一国史としてのソ連史」の構築が急務となった。では、1937年の雑誌『ソヴィエト考古学』第2号に掲載されたこの決議に関する編集部（Редакция СА 1937）に基づき、ソヴィエト考古学における研究の方向転換をみてみる。

この声明で重要な点は、「一国史としてのソ連史の構築を念頭に置いた民族起源論への研究方針の転換」と「遺跡・遺物分析による考古学的方法に立脚したマルクス・レーニン主義による客観的な歴史認識」である。一方、この声明で考古学の「社会学化」とは、「具体的な歴史や文化史に関する精確な遺跡・遺物分析的な研究に代わって、如何なる方法論をも持っていない〈歴史研究の統一〉としての社会構成体を研究することだけを推奨した」学問である（Редакция СА 1937: 2）、と酷評された。さらに、それは、「考古学者の思考を墮落させ、そして、考古学者を皮相的見解、客観的事実を軽蔑する姿勢、自身の学問や物質資料に対する無責任さへと導くものである」「図式主義」（Редакция СА 1937: 6）として糾弾された。

しかし、この声明で考古学における「社会学的傾向」までは否定していないことに注意する必要がある。考古学における露骨な「社会学化」や「図式主義」は避けるべきと釘を刺してはいるが、考古資料による物資の生産史や社会経済学史の研究は、型式学的研究に没頭するブルジョワ考古学研究と比べ、ソヴィエト考古学の到達点であり前進である（Редакция СА 1937: 3）、と主張している。

では、考古学における「社会学化」や「図式主義」ではない、「社会学的方向」を有する考古学を志向するためにはどうすればよいのか。そのためには、「遺物・遺跡の検討を踏まえた部族あるいは民族の歴史や文化史による研究」、すなわち「歴史の過程における民族の形態や土着民の特性を解明する研究」としての「具体的な歴史学的・考古学的研究」に立脚するべきである、と考えられた（Редакция СА 1937: 4）。そして、「考古学者は、考古資料により社会経済構造の模範的特徴を研究してはいるが、普遍性は常に特殊性の中にこそ現れること、社会の文化とは民族の形態なしでは存在しないこと、すなわち部族、部族連合、そしてナロードあるいは国民なしでは存在しないこと、をしばしば忘れていた」<sup>7)</sup>（Редакция СА 1937: 4）、と指摘した。ここに、精密な考古学的分析に立脚した民族起源論が「一国史としてのソ連史」の構築において重要な役割を演じることを確認することができる。

また、声明の中の考古学者が遵守すべき歴史観についてみると、「歴史認識の客観性に対する観念的な否定や科学に対する主観主義は、客観的真実による真の歴史科学を確立しているマルクス・レーニン主義と何も共通していない」（Редакция СА 1937: 6）、と主張している。そして、「各歴史家、各考古学者は、自身の研究の中で、マルクス・レーニン主義の創始者による業績に絶え間なく注意を向けなくてはならない。また、現在において真の客観的な歴史科学を確立することを目指しながら、彼らの業績を念入りに研究しなくてはならない」（Редакция СА 1937: 6）、として結論付けている。

以上、1934年の「歴史教科書に関する決議」についてのソヴィエト考古学の声明を整理してみる

と、その後のソヴィエト考古学の研究方針の転換についての確固たる決意を読み取ることができた。普遍的な「人類史」の解明を目指し、社会形態や社会制度、生産技術といった思弁的・理論的側面を強調した、考古学の「社会学化」としての「物質文化史」研究は、その重要性を無くしはじめ、再び発掘調査や遺物分析といった考古学的方法に対する尊重が見直された。それは、個別的・特殊的な「一国史としてのソ連史」の解明を目指し、具体的な遺跡・遺物分析により獲得された歴史認識の客観性を著しく強調する新たなマルクス・レーニン主義による考古学によって取って代わられた。また、マルクス・レーニン主義の歴史観の中で主張された「一国史としてのソ連史」は、個別性と特殊性と普遍性とを兼ね備えるものであると考えられる。

## (2) 民族起源論の研究

1934年の「歴史教科書に関する決議」以降、「一国史としてのソ連史」の構築を目的とする民族起源論は、ソヴィエト考古学の重要な課題となった。民族起源論の研究は、帝政ロシア時代の古民族学的研究や文化型式学的研究で扱われていた民族論とは一線を画する。通時的方向の変化としての編年論的視点を重視する古民族学的研究は、民族の内的発展を重視する点において民族起源論の研究と同じある。しかし、古民族学的研究がダーウィンの生物進化論を、民族起源論の研究がマルクスやエンゲルス、レーニンによる発展段階論を前提にしている、というように基本とする理論が異なっている。また、共時的方向の変化としての分布論的視点を重視する文化型式学的研究は、同一型式と認識された遺物分布圏を同一民族の生活領域と考える点において同じである。しかし、文化型式学的研究は文化変化が民族の移住論で語られるのに対し、民族起源論の研究は社会形態や社会制度、生産技術の内的変化として語られている。

遺跡や考古資料についての報告や遺物分類作業はもう否定されることは無く、むしろ客観的な方法論として推奨された。だがしかし、発展段階論による社会経済的な問題群の研究が、ソヴィエト考古学において重要な課題であることは依然として変わらなかった。1934年以降、ソ連邦領域に住んでいた古代民族の社会形態や社会制度を復元することで民族起源の解明を目指した、経済的特徴や集落や埋葬施設の構造的な研究が進められていた。

1940年、レニングラードの物質文化史研究所（イーンク：ИИМК）の総会において北方民族の起源の問題が議論された。そこでは、A. P. オクラドニコフ（А. П. Окладников）、V. N. チェルネーツォフ（В. Н. Чернецов）などが沿ウラル、シベリア、極東における古代部族の拡散についての図式を提示した。同じ年、モスクワでも、スラヴ民族の起源についての定例会議が開催され、M. I. アルタモーノフ（Н. И. Артамонов）やP. N. トレチャーコフ（П. Н. Третьяков）によって真剣な議論がなされていた。

1930年代末にルーシ（古代ロシア）の文化についての諸研究が提示されてきたのは、決して偶然ではない。国家の指導者が国際主義を志向していた時代は過ぎ、1920年代から1930年代初めのロシア建築の著しい破壊や民族史的伝統の侮辱を行ってきた時期は終わった。ファシズムの進入を直前に控え、より民族主義的概念へと傾斜することは必然的であったと言えよう（Формозов 2006: 73-74）。また、ファシズムの侵略に対抗するため、国内での民族の発生や起源だけでなく、民族の拡散や移住といった帝国主義的な思想も研究する必要に迫られた。

## (3) 1934年代以降のソヴィエト考古学と海外考古学

1934年以降のソヴィエト考古学者たちは、海外の研究者に興味を与える概念を語りだした。フラ

ンスやチェコスロバキアの旧石器時代の住居構造の調査や研究は、エフィメンコをはじめとするコスチョンキ遺跡群で従事していた研究者たちによる方法論を利用し、1940年代に行なわれた<sup>8)</sup>。また、世界的な社会考古学者であるイギリスのV. G. チャイルド (V. G. Childe) は、E. Yu. クリチェフスキー (E. Ю. Кричевский)、トレチャークフ、A. P. クルーフ (A. П. Круглов)、G. V. ポドゥガエツキー (Г. В. Подгаецкий) というロシア研究者たちを自分の先生であると宣言している (Childe 1946: 6)。

この時期のソヴィエト考古学の研究手法の独創性とは、野外調査での詳細なデータ収集や精密な遺物記載に基づいた考古学的分析方法で民族的形態・文化を復元することによって、社会形態・社会制度・生産技術の関連性や変遷を理解し、先史時代から現代社会まで連続する発展段階史観を構築する点にあった。これは、同時代の型式編年論的研究が主流であった海外研究と比べても際立っていたと指摘することができよう。

独創的なソヴィエト考古学研究を担った1930年代後半に活躍する考古学者は、遺跡・遺物分析による精密な型式学を重んじた革命以前の帝政ロシア考古学者を自身の指導者としていた<sup>9)</sup>。そして、彼らは、1930年代前半に活躍したキバリーソフやピコフスキー、そしてラヴドニカスが指揮した、社会形態や社会制度をただ発展段階に沿って貼り付けただけの考古学の「社会学化」としての「物質文化史」研究も実践してきた。1930年代前半のガイムクでの研究環境は、1930年代後半以降の若い研究者にとっておそらく自由な議論をすることを許さなかったことは想像に難くない。しかし、この時期、次世代を担う研究者は、「物質文化史」研究から理論的側面を学び取ったのであった。また、革命前の帝政ロシア研究者たちの一掃・排除は、若い世代にとって新たな道を切り広げる一要因でもあったことを認識する必要がある。更に、1934年の「歴史教科書に関する決議」は、考古学的方法論を拒絶したガイムクという彼らにとっての「重圧」を取り除いた。そして、以前のような考古学的手法が復権したことによって、新しい世代の独創的な研究が開花したと考えられよう。

#### (4) 考古学者の粛清と考古学の中央集権化

1937年から、国立アカデミー物質文化史研究所(ガイムク：ГАИМК)は、物質文化史研究所(イームク：ИИМК)と名前を変更し、アカデミー・システムに入れられた。また、1936年からレニングラード大学で、1937年からモスクワ大学で、歴史学部内に考古学講座が設立された。ソヴィエト考古学は、再び「普通の状態」を獲得し始めた。まだマルの言語学理論は考古学において必須条件ではあったが、しかしそれは、1934年のマルの死も伴ってか、もう現実的に作用していなかったと言える。

考古学の基本的な権利は回復したが、それは学問的な自由を獲得したことを意味してはなかった。スターリンの大粛清によって、考古学者に対する弾圧は更に続いた。1937年にイルクーツクのB. E. ペトリ (Б. Э. Петри) をはじめ、ベラルーシーの考古学者やキエフの考古学者が銃殺され、また多くの考古学者たちが逮捕された。このような状況下、極度の中央集権化が強化された。1930年代前半、ゴロツォフの弟子である、マルクス・レーニン主義の考古学者のアルツィホフスキー、S. V. キセーレフ (С. В. Киселев)、A. P. スミルノフ (А. П. Смирнов) は、ガイムクの子供支部に入るため、彼ら自身の研究を否定することを強要された。この時から1941年の大祖国戦争まで、モスクワの研究者集団は、レニングラードに本部があるガイムク (1937年からイームク) に完全に隷属化した。ガイムクは、古代研究分野における中心的役割を各研究機関に与えることを拒絶していた。考古学の復権後、地方における中心的役割をもつべき研究所や地方組織は、著しくその

機能を停止した（Формозов 2006: 62-63）。

#### (5) 1934年以降の研究の研究動向のまとめ

「歴史教科書に関する決議」が提出された1934年以降では、ソヴィエト考古学研究の方向性がそれ以前とはまったく異なることが分かった。普遍的な「人類史」を志向した考古学の「社会学化」としての「物質文化史」研究に代わり、個別的・特殊的な「一国史としてのソ連史」を志向した民族起源論による考古学が、ソヴィエト考古学の第一の課題となった。それは、隣国のドイツにおけるファシズムに対抗するための学問の構築という性格をもつが、その一方では、海外研究者が注目するような独創性をもった研究も多く生まれた。また、考古学の復権は学問的自由が確保されたことを必ずしも意味するのではなく、研究者の粛清や考古学の中央集権化といった強度のイデオロギー的統制は、なおも引き継がれた。

### 5. まとめ

マルクス・レーニン主義の考古学としてのソヴィエト考古学は、革命以前の帝政ロシア考古学の否定からはじまり、普遍的な「人類史」を志向した考古学の「社会学化」としての「物質文化史」研究から、個別的・特殊的な「一国史」を志向した遺跡・遺物分析を採用した「社会学的方向」を持つ考古学研究へと研究方針を変化しながら確立していった。その背景には、1928年のスターリンの「文化革命」による「ブルジョワ文化」から「プロレタリア文化」への転換、1934年の「歴史教科書に関する決議」による党内でのイデオロギー的転向（変革のイデオロギーから体制維持のイデオロギーへ）を経て、マルクス・レーニン主義としての教義を受け入れて行った経緯が存在する。スターリンによる独裁政権が確立へ向かう動きと密接に関連して、マルクス・レーニン主義をめぐるソヴィエト考古学内での変化があった。特に、1934年以降のソヴィエト考古学におけるマルクス・レーニン主義をめぐる変化は、「トロツキズムの右派の駆逐によるスターリン個人崇拜と一国社会主義の強化」と、「ファシズムの台頭への対抗としての民族主義への傾斜」という国内外の状況によって引き起こされた。それは、ソ連の国家あるいは党のイデオロギーに左右された学問として我々の前に浮かび上がってくる。

また、この時期のソヴィエト考古学が海外の考古学者に注目を浴びたのは、無論、研究の独創性もあるが、1929年の大恐慌という資本主義の本質的な欠点が露呈したことで、社会主義の優位性が際立ってみえたことも大きな要因であったと考えられる。しかし、このような独創的であると評価されたソヴィエト考古学の裏には、マルクス・レーニン主義という国家あるいは党のイデオロギーの上に築かれてきた研究の歴史が存在したことを我々は思い出しなくてはならない。

ソヴィエト考古学におけるマルクス主義の影響を考える上で、1889年にN. I. ジーベル（H. И. Зибер）により「原始経済文化概説」というマルクスやエンゲルスの影響を受けた本が既に出版されたことを指摘する必要がある。社会経済学的な問題が19世紀終わりから20世紀初めにロシア歴史科学において徐々にその地位を占めてきた。イデオロギー的研究以前に、このような研究的志向が実施されていたことは重要である（Формозов 2006: 64-65）。このように考古学における社会経済学的な志向性は、科学における内的発展により起こった結果でもあり、単に外部から強制されたものでは必ずしもない。しかし、考古学における古典的マルクス主義による研究が結果的に国家や党からの強制に負けてしまい、「絶対的真理」を発展段階論的史観により追究するマルクス・レーニン

主義の研究にとって代わったことは、その後のソヴィエト考古学を大きく規定したことは間違いないだろう。

マルクス・レーニン主義の本質は「絶対的真理」である。それは、ソヴィエト時代における全学問の前提であった。ソ連邦の崩壊により、学問はマルクス・レーニン主義という教義を強制されることはなくなった。かつてレーニンの最大のライバルであった古典的マルクス主義者のアレクサンドル・ボグダーノフは、スターリン時代には聖典となったレーニンの『唯物論と経験批判論』について、「絶対的真理」といった概念は虚構であり、それは「科学」でなく「信仰」であると評していた（佐々木 1997：43-53）。

現在、ソヴィエト時代の考古学とは一体何だったのかという前世紀だけでなく今世紀にも通じる課題に対し、ロシア考古学者自身が様々な立場で困難を伴いながら答えは始めている。しかし、ソヴィエト考古学の歴史が持つ意義は、ロシアだけでなく日本も含めた諸外国にも存在し、それは各国の考古学史から簡単に理解することができるであろう。ソヴィエト考古学における歴史の複雑な重層性を紐解いていくことは、考古学者自身が依拠する諸概念や諸理論を本質的に見直すことに思えてならない。

本稿を作成するにあたり、北海道大学の加藤博文先生を始め、ロシア科学アカデミー物質文化史研究所の S. A. ワシリエフ博士、北海道大学の高倉純先生には日頃より懇切な御指導を賜りました。また、S. S. マカロフ、鈴木宏行、直江康雄、長沼正樹、赤井文人、木山克彦、国木田大、中村賢太郎、斉藤譲一、瀬下直人、熊谷誠、山田和史の諸氏には多岐に渡る助力を頂きました。末筆ながら記して感謝いたします。

## 注

- 1) 本稿では、1917年以前の「帝政ロシア考古学」、1917-1991年の「ソヴィエト考古学」、1991年以降の「ロシア考古学」に分けて議論する。
- 2) マルクス・レーニン主義の考古学とは、国家や党のイデオロギーを遵守し、レーニンの自然弁証法を教条化した単線的な発展段階史観に基づき先史時代を主に研究対象とする学問である、とここでは定義する。
- 3) なお、帝政ロシア考古学における古民族学的研究の背景については、加藤博文によって検討されている（加藤 2008）。
- 4) 3月10日、ドンバス炭鉱のシャフトイという都市で、技術専門と外国機関をまきこんだ「反革命陰謀」の摘発が発表されが、この事件自体でつち上げであった（塩川 1997：145）。
- 5) フォルモゾフは、ラヴドニカスがアルツィホフスキーの「ヴァーチチの墳丘墓（クルガン）」を「ゴロツォフ的・ブルジョワ的型式学」と批判したことに対し、強く非難している（Формозов 2006：57-58）。ゲニーツィグの評価とは異なる。
- 6) 進化論者であったボンチーオスモロフスキーの場合、発展段階論への接近は自然であった。
- 7) 人類の「共同体」概念は、社会形態や社会制度の発展段階論によって区分されている。「氏族：род」、「部族（種族）：племя」、「部族連合：союз племен」、「ナロード（国家に準ずる組織を持てる民族）：народ」あるいは「ナーツィア（国民）：нация」となる。
- 8) 1960年代後半に行われたフランスのパンスヴァン遺跡を調査した A. ルロワ・グーラン（A. Leroi-Gourhan）が1930-1950年代のコスチョンキ遺跡群の調査を紹介した論文（Leroi-Gourhan 1961）を挙げ、フランス考古学に影響を及ぼしたことが述べられている。（Васильев 2008：77）

- 9) エフィメンコはヴォルコフの弟子であり、クルーグロフやポドゥガエツキーはミーレルの弟子であり、トレチャーコフやS. A. セミョーノフ (С. А. Семенов) はエフィメンコの弟子であり、アルツイホフスキーはゴロツォフやゴーチエの弟子であり、M. V. ヴォエボツキー (М. В. Воеводский) はジューフの弟子であった (Формозов 2006: 68)。

## 引用文献

- 加藤博文 2008 「サンクト・ペルブルク大学における古民族学派 — 帝政ロシアの先史考古学と Ф. Д. ヴォルコフ —」『北海道大学文学研究科紀要』125 33-55 頁
- 加藤博文 2009 「旧ソヴィエト考古学における民族起源論の系譜」高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』国立民族学博物館調査報告 №78 111-134 頁
- 佐々木力 1997 『マルクス主義科学論』みすず書房
- 塩川信明 1997 「第五章「上からの革命」」田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編『世界歴史大系 ロシア史 3 — 20世紀 —』山川出版社
- Child V. G., 1946, *Scotland before the scotts*, London.
- Leroi-Gourhan A., 1961, Préhistoire et archéologie préhistorique soviétiques, *Cahiers du monde Russe et Soviétique*, vol. 11, № 2, p. 262-272.
- Арциховский А. В., 1930, Новые методы археологии, *Вестник коммунистической Академии*, № 35-36, с. 322-325.
- Арциховский А. В., Киселев С. В., Смирнов А. П., 1932, Возникновение, развитие и исчезновение «марксистской археологии», *СГАИМК*, № 1-2, с. 46-48.
- Бонч-Осмоловский Г. А., 1932, О комплексном изучении четвертичного периода, *СГАИМК*, № 3-4, с. 44-49.
- Быковский С. Н., 1931, О классовых корнях старой археологии, *СГАИМК*, № 9-10, с. 4-5.
- Быковский С. Н., 1932, О предмете истории материальной культуры, *СГАИМК*, № 1-2, с. 3-6.
- Васильев С. А., 2004, Современное палеолитоведение и русская археология, *Археология: детектив и мыслитель (Сборник статей, посвященный 77-летию Льва Самойловича Клейна)*, Санкт-Петербург, с. 157-166.
- Васильев С. А., 2008, *Древнейшее прошлое человечества: поиск российских ученых*, Санкт-Петербург.
- Гениц В. Ф., 1982, *Очерки по истории советской археологии (у истоков формирования марксистских теоретических основ советской археологии. 20-е — первая половина 30-х годов)*, Киев.
- Ефименко П. П., 1923, Доисторическая археология, ее задачи и перспективы в областном изучении, *Краеведение*, № 2, С. 93-98.
- Ефименко П. П., 1926, Экспедиция для изучения палеолитических культур, *СГАИМК*, № 1, с. 319-320.
- Жуков Б. С., 1930, *Происхождение человека: 4-е изд.*, М.—Л.
- Замятнин С. Н., 1929, Экспедиция по изучению культур палеолита в 1927г., *СГАИМК*, № 2, с. 209-214.
- Замятнин С. Н., 1935, Раскопки у с. Гагарьно(верховья Дона), *ИГАИМК*, № 118, с. 26-77.
- Мещанинов И. И., 1930, Палеоэтнология и *Homo sapiens*, *ИГАИМК*, т. 6, № 7.
- Никольский В. К., 1923а, *Очерк первобытной культуры*, М.—Пг.
- Никольский В. К., 1923б, Комплексный метод в доистории, *Вестник Социалистической*

*Академии*, № 4, с. 309-349.

Равдоникас В. И., 1930, За марксистскую историю материальной культуры, *ИГАИМК*, т. 7, № 3-4.

Редакция СА, 1937, Наши задачи в области археологических исследований, в связи с решениями ЦК ВКП(б) и Совнарком Союза ССР об учебниках по истории, *СА*, № 2, с. 1-15. (邦訳:『ソヴィエト考古学』編集部「〔資料5〕歴史教科書に関するソ連邦共産党中央委員会とソ連邦人民委員会議との決議に関する、考古学分野でのわれわれの課題」ユ・イ・セミョーノフ (中島寿雄・中村嘉男・井上紘一訳) 1971『人類社会の形成 下巻』378-388頁)

Формозов А. А., 2006, *Русские археологи в период тоталитаризма: Историографические очерки*, Москва.

# The Soviet Archaeology as Marxism-Leninism Archaeology

Kenji SUZUKI

Doctoral Course in the Division of History and Area Studies, Graduate School of Letters, Hokkaido University

It is thought that the Soviet archaeology which continued from 1917 to 1991 is divided into two features. One is the research of local cultural history and another is the research of human social history. In the Soviet archaeology, the most important point is that the historical view of Marcus Leninism dogma existed until the collapse of the Soviet Union. The examination of the history of the Soviet archaeology to which “archaeology” and “national ideology” related serves as the cause which archaeologist itself recognizes about the danger which exists in archaeology.

In this paper, the Soviet archaeology in the 1920s and 1930s is divided into three periods: 1) from after a revolution to 1928, 2) 1929-1933, 3) after 1934. And I examine the formation process of Marxism-Leninism in the Soviet archaeology.